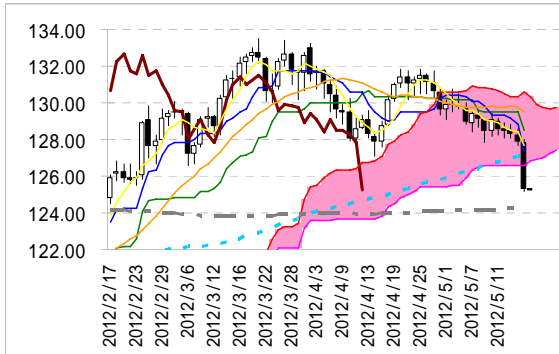
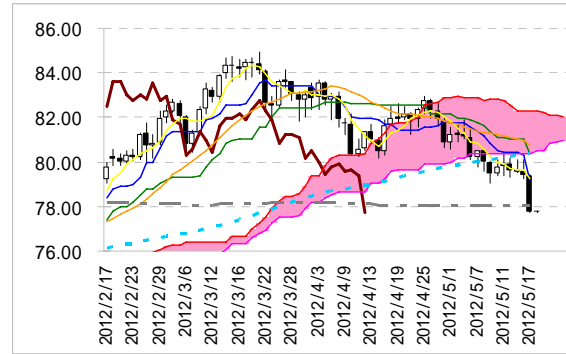


## ポンド円の推移



## 加ドル円の推移



### 来週の展望 (予想レンジ ポンド円 125.00 - 130.00円 加ドル円 78.00 - 81.50円)

16日のイングランド銀行(BOE)四半期インフレ報告では、中期のインフレ見通しと成長率がそれぞれ前回から引き下げられた。経済の先行きは「極めて不透明」とし、欧州の債務危機の影響に警戒感を強めている。同日にはメンバーの一部から1-3月期GDPが上方修正される可能性も聞かれたが、英国債の購入を通じた緩和策の再開にも含みを持たせており先行きは楽観視できない。来週は23日に英金融政策委員会(MPC)議事録や英4月小売売上高などが発表される。議事録では前回1名に減少した緩和支持の票数がどのような推移をたどったかが注目される。高インフレに配慮し、いったん量的緩和策の打ち止めが決定されたが、さえない英国の経済情勢や欧州懸念の高まりを背景に、緩和を支持する委員が増えたことが確認されれば、ポンドの下げ幅が広がる可能性があることは念頭に置いておきたい。小売売上高についても、暖冬の影響を受けた前月分の反動による下振れも加わり、弱い結果となればポンドの下押し要因となるだろう。ただ、ユーロ圏債務国からの逃避資金の流入で堅調な推移を続ける英国債の動向や、対ユーロでのポンド高基調が、ポンドドルやポンド円の下値を支える可能性はある。ポンド円は低下する日足一目・転換線に沿うように軟調に推移した。下値のめどと目されていた、年初からの上昇幅の38.2%押しとなる127.27円や、4月16日安値127.12円を割り込む動きを見せた。前述の上昇幅の半値押しとなる、125.38円近辺までの下落余地は想定しておきたいところだ。

加ドルの上値は限定的か。カナダ国内のみならず、経済的につながりの強い隣国の米経済の底堅さも背景に、年後半から来年にかけての利上げ観測は依然として根強い。16日に発表された加製造業出荷も堅調な結果となり、足元の好調な情勢を裏付けた。ただ、NY原油先物は一時91ドル台まで下落するなど、米国での高水準の原油在庫や、欧州・中国での需要後退が意識され加ドルの上昇を抑制しそう。目先の上値は限定的と見ておくべきだろう。加ドル円は下げ足を緩め、79円台を中心としたもみ合いに転じているが、トレンド的には200日移動平均線が位置する78円前半までの下落余地が想定される。上値は80円台半ばで緩やかに上昇する90日移動平均線が抵抗となりそうで、戻り局面では重さを感じさせるだろう。

### 今週の回顧

ギリシャで再選挙の実施が確定し、同国のギリシャ脱退の可能性が高まった。ユーロ圏高債務国の国債利回り上昇や世界的な株安・商品安の流れのなかでリスク回避姿勢が強まったほか、相対的に底堅い米国の経済情勢を背景にドルが独歩高の様相に。ポンドはイングランド銀行(BOE)四半期インフレ報告で成長見通しが引き下げられたこともポンド相場を圧迫し、対ドルは3月下旬以来の安値となる1.57ドル後半まで下落。ポンド円も126円半ばまで売られた。加ドルもドル全面高のなかであって軟調推移。原油価格が続落したことも嫌気された。先週末11日の加雇用統計の強含みを受けた上昇分を吐き出すと、対ドルは1.01加ドル半ば、対円は78円後半まで加ドル安が進んだ。(了)